

フィンランド

日が高い6月の午後4時。フィンランドの首都ヘルシンキの中央駅は、仕事を終え帰宅する人で混雑していた。

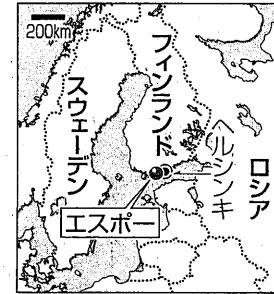
女性就業率の高さで知られるフィンランドは、夫婦共働きが当たり前。女性が生涯に産む子どもの推定人數を示す合計特殊出生率も高く、1・8程度で推移し日本の1・46を上回る。その背景の一つが残業の少なさだ。

女性の8割がフルタイムで働くが、1日の労働時間は7時間半が一般的。午後4時には退社し、帰宅時間が午後5時には終わっているのが日常の風景だ。

ヘルシンキから西に約20kmのエスボーにあるIT企業の社長ベーラ・シリビウスさんは「働き過ぎの度は、労使が協定を結べば従業員がオフィスに入れなくなつて『青天井』の働き方が可能となるが、フィンランドは労使合意がある」。

21・3%で、男性に限ると日本の30・0%に対し、フィンランドは11・5%とほんのエスボーにあるIT企業の社長ベーラ・シリビウスさんは「働き過ぎの度は、労使が協定を結べば従業員がオフィスに入れなくなつて『青天井』の働き方が可能となるが、フィンランドは労使合意がある」と語った。

いよう鍵を取り上げることもある」と語る。残業には最大2倍の賃金を払わないと無理せず売り上げを出すのが良い経営だ。会社員の夫とともに、12歳と10歳の息子を育てる母親でもある。



安倍政権が「最大のチャレンジ」と位置付ける働き方改革の議論が本格化する。8月の内閣改造で担当相を新設し、9月27日には関係閣僚や有識者による「実現会議」の初会合が開かれた。長時間労働の抑制、非正規労働者の待遇を改善する「同一労働同一賃金」の実現を掲げるが、どういった社会を描こうとしているのかは明確ではない。取り組みが進む欧州の実態を探つた。（本文中の年齢は取材当時）

働き方先進地に学ぶ

残業制限、午後4時帰宅

男性の育休取得も浸透



❶育児休業を取得したアレクシ・リント・カウッピラさん。妻エイラさんと長女ミイナちゃん

❷仕事を終えて帰宅する人などで混み合うヘルシンキ中央駅

=いずれも6月、ヘルシンキ（共同）

男性の育休取得も浸透

男性の育休取得も浸透